
フェンリルさん頑張る

けんしょ～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェンリルさん頑張る

【Nコード】

N6772Z

【作者名】

けんしよ

【あらすじ】

村でのんびりと生活してた青白い琅・佐藤凍^{さとつこおる}はフェンリル（笑）である。転生者（笑）でもある。色々あって村を出ることになった彼はとりあえず頑張ろうか？の精神で生きていく。旅を共にする幼馴染は若干壊れているがなんとかならないか？ ならないな。

1話 旅は唐突に（前書き）

魔法の無いファンタジー考えてたらこんな話になりました。
魔法はないけどトンデモ武器はあるよ？

1話 旅は唐突に

獲物を発見した。

俺が居る木の真下、木の根元に蠍みたいな青白い魔獣が居る。鋏の先には猫耳の兎が捕えられている。動かないってことは死んでるみたいだ。

今日は大漁だな。

蠍を見下ろしていた木から蠍に向かって飛び降りる。蠍が俺に気付く前に空いている鋏を爪で貫き地面に叩き付ける。

急なことに反応できない蠍の顔にパンチ。

と言っても俺の手でパンチしようものなら爪で突くような攻撃になる。頭の骨ごと脳らしき柔らかくてグニャッとしたものを貫いた。

蠍は一瞬ビクツと体を痙攣させて動かなくなる。兎はやっぱり死んでいるようでそのまま俺の食料決定だ。

今日は中々のご馳走だな。特に蠍の尻尾は火で軽く焙るとプリップリの海老みたいな食感と味、仲間内で取り合いになる前に食わねば！

俺は人里離れた森に住む氷狼族。幻狼族と呼ばれる狼の1種族だ。体格的にはもののけ姫の子狼を連想してくれ。あれで青白い毛だと思ってくれば大体あつて。毛にしては硬くて人間曰く氷殻らしい。モンハンみたいなネーミングだがこの世界にリオレウスなんて飛竜は居ない。似てるのは居る。

さて自己紹介を続けよう。佐藤凍、オス、16歳。俺のプロフィールだ。

ファンタジーの名前じゃないって？ 知らん。人間はニーナとかジヨンとか呼ばれているのを聞いたことがあるが魔獣の名前でそんなのは聞いたことがない。友達には山田花子なんてのも居る。

俺の住んでいる村は森の奥深く、人間が入って来れないような場所にある。森の浅い範囲にはゴブリンが生息していてよく人間と小競り合いをしている。少し深く森に潜ろうとすればキングゴブリン（5メートルくらい）がダッシュで追っかけてくる。ちょっと前に人間の大部隊が討伐に来たらしいが全滅したと聞いた。誰に？

ゴブリンの友達に。

それでもどうにかゴブリンを出し抜いて森の中腹に入ると今度は昆虫系の魔獣に襲われる。特に評判が悪いのはワームだ。又メツた芋虫みたいな見た目で人間丸呑みにするような魔獣なんだが気持ち悪がられると傷ついてショボンとする。ちなみに山田花子だ。繊細で傷つきやすい奴なので優しく接してあげてほしい。魔獣は見た目じゃないんだよ！

さて、興奮した頭をちよつと冷やそう。

爪に氷を纏わせて冷えピタ代わりにする。おゝ、冷たくて気持ち良い。

落ち着いたところで村が見えてきた。今日は隣村から幼馴染が来ている。

あいつなら蠍の尻尾も上手に焼けるだろう。ちゃんと焼いてくれたら半分くらいは分けてやろう。

「ただいま」

「あつ！ お前なんで村に居なかったんだよつ！ 速く村長の所行つてこいよつ！」

近くに居た見張り係に挨拶したら怒られた。

俺が狩りに出るのは昨日の内に話してあったはずんだけどな？ 理不尽に怒られてる気がしてならないが何も言わずに村長の家に向

かう。狩った獲物は村長の家に行く途中で俺の家に置いていった。親に食われそうだったから尻尾だけは食わえていった。これだけは譲れん！

「こんちわー。村長、見張りからの伝言で来ましたよー」

村長の家の前で扉をノックしてから来客だと伝える。『待つてろ』と村長が言い終わる前に扉が凄い勢いで内側から開く。咄嗟にバックステップで直撃は避けたが村長宅から俺に向かって飛び出してきた影までは避けきれなかった。

「ひっさしぶりー！」

飛びかかってきたのは炎のように紅くてフワツとした毛並みの狼。

炎琅族の林焰^{はやしほむら}、16歳、メスだ。

林が燃えてしまうとか言うツツコミはなしで。一部のオスは萌えてしまうらしいが、俺の幼馴染です。

炎琅族とは爺さんの代まで敵対関係にあったが今の村長同士が無益な争いに終止符を打ってから隣村ということで仲良くやっている。今では氷琅と炎琅のハーフまで居るくらいだ。

「会いたかったよ、凍〜！」

グイグイと顔をすり寄せてくる。オスとしては嬉しいが正直離れてほしい。焰の親父さんがモノっ凄い笑顔でこっちを見ている。ただし目は笑っていない。

口パクで何か言っている。

『後で山裏来いや』

絶対に行きませんとも。

「再開を喜ぶのはその辺にして中に入れ。乳繰り合うのは後にしろ」

威厳のある声に焰がピシッと背筋を伸ばして俺から離れる。

声の主は氷琅族の村長、年は54と中々年寄りだが未だに負け知らずのトンデモ爺さんだ。

さて、俺が呼ばれたのは他でもなく焰が居るからだろう。焰は俺くらの年の奴らからかなりのアプローチを受けている。その護衛係が俺だ。

幻琅はどの種族も『好きな相手は力尽でモノにしろ』と考えているから焰は結構襲われる。そんなとき白羽の矢が立ったのが同世代では腕も良く、焰を襲わない（焰が襲われても良いと言った）俺だったので親父さんの頼みで焰が村に来た時の護衛をしているのだ。睨むな、理不尽だ。

とにかく村長宅に入る。

机の上には鍋とスープが置かれている。キッチンから人化した村長夫人が人数分の皿とスプーンを持ってきた。

「さっさと人化して席に着け」

幻琅族は狼の姿から人間の姿になれる。と言っても髪は俺なら青白くてストレート、焰は紅くてフワツとしている。これが人間とは大きく違う特徴だろう。

村長に言われたとおり人化し席に着く。

「さて、凍、お前に命令がある」

16歳に何を頼む気だ（魔獣は大体18で成人）。

「炎琅族の村に行け。雷琅族との抗争が本格化したら、子供たちを守れ」

「明らかに荷が重過ぎるっ！」

思わず叫んでしまった。まさか子供にそんなこと頼むとは思わなかった。

「まあ待て、話は最後まで黙って聞け。質問は後で聞く」

今直ぐ断りたい。

「何もお前だけというわけじゃない。お前はあくまで予備の予備。本当にどうしようもなくなった時に子供たちをこの村に案内するだけだ」

追っ手の雷琅がロリコンだったらどうすんだよっ！ てか雷琅ってオスもメスも繁殖に積極的だって聞いたぞ？ 下手したらシヨタコンに狙われるっ！？

「ちなみに今の雷琅族は同性での行為が流行っているらしい。精々掘られんように気を付けろ」

余計心配になったわっ！

てか気を付けなきゃなんないのはメスじゃなくてオスかよっ！
せめて綺麗なお姉さんに襲われたかったよっ！

「凍、お前の幼馴染の村が雷琅に蹂躪されるかもしれないのだ。幼

馴染の不安を少しでも和らげようという気概はないのか」

「そんな気概はホモレズ話で吹き飛んだ」

どうせなら焰とお姉さんの絡みを眺めたいくらいだ。美少女がお姉さんにアフンアフン言わされている光景……アリだな！

逆に自分が野郎に掘られている姿……吐きそうだ！

「腑抜けが。だがこれは決定事項だ。この村にお前の帰る場所はない
い」

「この悪徳村長っ！」

「では囁かだが宴を開こう。氷琅と炎琅との協力を祝してな」

この会話に焰や親父さんは終始無言だった。ちょっと気まずそうだったのが腹立たしかった。

2話 旅路はイベントに（前書き）

前回の荒筋：村から追い出されました

2話 旅路はイベントに

翌日、本当に俺は家から追い出され隣村に行くことになった。

他にも炎琅の村に行くことになった奴は結構居るみたいだったが、同年代のオスは皆焰が狙いみたいだ。目的分かってんのか疑問だが言っても始まらない。

昨日の宴の間はやけ食いして気分を紛らわせていた。焰は何度も俺の方に来ようとしていたがオスたちに足止めを食らって中々来れないようだった。

俺は他の肉を食ってから尻尾を焙ろつと火を探していたら焰に捕まり、仕方なく仲良く尻尾を分けあった（殻ごと炙って中には熱だけ通すのがポイント）。

狩ったのは俺だが炙ったのは焰だ。食い物は狩った者にも調理した者にも食べる権利がある！というのが俺の持論だ。

俺と焰と一緒に尻尾を食い始めてから嫉妬の視線が凄かったのは思い出したくもない思い出だ。

で、森の中。

先頭は親父さん、次に焰、俺。その後ろに氷琅が3匹（オス2のメス1）。これだけの戦力なら人間の国の1つや2つは簡単に落とせるが無意味な上に時間と体力の無駄なので誰もしない。

大体人間を襲ってもメリットが無いのだ。食える部分は少ないし美味くもない。人間を襲っても何も得られないのだ。

「凍は私たちの村に来たことないよね？」

思い出してみると焰はよく氷琅の村に来たが俺が炎琅の村に行ったことはなかった。

「じゃ案内するよ！ 何から行こうかな？」

おーい、俺はOK言ってるぞ？ まあ断る理由もないし案内してもらおうか。どうせ俺は狩りくらいしかすることないしな。

「あ、そう言えば凍ってお風呂大丈夫？」

「水浴びじゃなくてか？」

「うん、熱湯」

「温度による」

「じゃあ試そう！」

「はいはい」

暑いのは苦手だが、まあ何とかなるだろう。

炎琅の村までは歩いて3日はかかる。その間、焔に群がるオスたちが色々と不安だが村長が選んだんだしそこまで酷いことにはならない……と信じたい。

その夜、持ってきたゴザを広げると焔寄ってきた。さっきまでは唯一のメス同士で野宿の準備をしていたのだがどうしたのだろうか……いや、分かってるよ。そんじょそこらの鈍ちん主人公と同類扱いは御免だ。

何も言わずにモジモジしているところを見ると俺の予想はかなり正解に近そうだ。焔の後ろではメスが木陰から覗くフリして俺に無言の圧力をかけてくる。これは俺が悪いのか？

「どうした？ 眠れないのか？」

『一緒に寝るか?』などと言ったら間違はなく親父さんはキレる。
あくまで焰から言ってもらわないと俺の命が危ない!

「えへへ……やっぱり、不安みたい」

「当然だろ。さっさと寝ようぜ」

ゴザにもう1匹なら寝れるスペースを開けて横になる。これなら焰が自分から入ってきましたと言いつける!

ちよつと自分が情けないと思った。

翌朝、習慣で日の出と共に目が覚め周りを観察する。普段だったら見慣れた自分の部屋だが今日は外でゴザを敷いただけなので木が乱立する森の中だ。

さて、誰も起きていないようだし今の内に離れて……人化した焰が俺の前足を握って離さない。

……どうしよう?

仕方ないので焰の顔をペシペシ叩いて起こす。

人化は便利だが俺たちくらいの年だと上手く制御できずに耳や尻尾が残ったり、寝ている間に変わってしまったりするのだ。耳と尻尾だけなら獣人と言い貼れる。

人化する回数が多い奴ほど寝ている間に人化しやすいらしい。

俺は人化することはできるが滅多にしないので寝ている間に人化した経験はない。

人化する際は何か故か服を着た状態になる。人間は普段から服を着ているからだろうと村長は言っていた。人化はできるが何か故できるのかは誰も知らないのだ。

ちなみに服を脱いで狼に戻ると毛が少し薄くなるらしい。試したこ

とないから分らん。

「うゝ……おはよ」

「おはよう」

ようやく起きた焰はまだ俺の前足を握ったままだ。

あ、親父さんが起きる。早く離せ。

「おはよう、お父さん」

「おう……朝飯食ったら行くか」

離してもらえなかった。

親父さんの視線怖いな。

朝食の干肉を仲良く分け合って出発。炎琅の村まであと2日、それまで親父さんに殺されないように細心の注意を払わなければ俺は死ぬ！

焰が気を付けるだけでもかなり安全なのだがそうは問屋が卸さない！昨日1日で俺は学習した。焰は親父さんの視線に気付いてない。

焰、前から思ってたけど、お前鈍すぎ。

昔から襲われるまで相手の気持ちに気付いてなかったんだな。そりゃオスたちも襲うなんて強行手段とるって。アタックしても気付いてもらえないんじゃないか分かり易いことするしかなかったって。肯定する気はないけどな。

「あの崖道を北に進む。踏み外して落るなよ」

森が晴れた先は断崖絶壁になっていた。この崖沿いに進むと向こう側に渡れる橋がある。橋と言っても大木を倒しただけだが。

下を覗いてみるとかなり深いことが分かる。ついでに崖の下は激流だとも分かった。

落ちたら人生終了のお知らせか……怖っ！

まあこんな場所で幻琅の一団に喧嘩売るような馬鹿は……

目の前に殺気立った6本足のカマキリ（体長2メートル）×5

居たよ。と言うか俺の思考がフラグだったよ。なんでこんな時にこんなフラグ立ててるんだよ。多脚だからこんな足場でもヘッチャラなんだぜとか卑怯臭いよ。てか虫が狼に喧嘩売るとかヒエラルキー無視し過ぎだよ。そして俺のツツコミ長いよ、多いよ、現実逃避止めろよ！

「何でこんな所につ、邪魔だ！」

先頭の親父さんが『キシヤーツ！』とか威嚇してくる目が赤く発光しているカマキリに飛び掛り頭を噛み砕く。

でも親父さんは何に驚いたんだ？

って、あっ！ カマキリの脳はカニ味噌みたいで美味しいんだぞ！

それをグチャ味噌にするなんて勿体ない！

「やりやがったなっ！」

親父さんに群がるカマキリの内の1体を横から突き飛ばし、倒れたところで首だけ切り離す。氷の爪は鋭くて便利だ。

焔は炎を纏った体当たりで1体倒したみたいだな。首は無事のようにだ。

「なっ！」

一瞬で自分たちが不利になって驚いたか？ だがまだだ！ カマキリ味噌の美味しい食べ方を模索するためにもお前達には犠牲になって

もらっ！

「おいつ、どうしたっ？」

……森から一杯カマキリが来てしまった。正確には何体かって？
一杯だよ！

緑色だから森に同化して見えづらかったんだろうな。湧いてくると
しか言いようのない増え方だ。

後ろは崖、前はカマキリ一杯……積んだな。

幻琅族には竜族が使うブレスなんて便利なものはない。氷にしても
炎にしても纏うだけで飛ばせない微妙に使いづらい能力なのだ。人
間はそれすらできないのだからマシだと思おう。

「凍、どうしよう？」

「……逃げるしかないな、それもバラバラに」

固まってたら狙い撃ちにされるだけだ。多分運の良い1匹くらいが
生き残れるだろう。

……意味無いな。

「やだ」

「却下だ」

林親子に駄目言われてしまった。どうしろと言っただ。

「相談は終わったかよ？ ええっ！」

リーダーっぽいのが声を荒らげてズイッと前に出てくる。ちなみに
他の3匹と分断されてて様子が分からない。きっと俺たちと同じ状
態だろうから気にしてもどうにもならないな。

「仕方がないな」

お、親父さん妙案があるのか？

「凍、焰のこと任せたぞ」

「は？」

何を言っでやがるんだ？

そう思ったら親父さんは炎を纏わせた前足を地面に向けて叩き付けて、

ピシッ、ガラガラガラガラ

崖崩しやがったーっ！！

「アホーーーーーっ！！」

「きゃああああああっ！！」

激流に落ちる前に見えたのは親父さんがカマキリに突撃する姿だった。

2話 旅路はイベントに（後書き）

今回の纏め：親父さんがトチ狂った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6772z/>

フェンリルさん頑張る

2011年12月24日02時46分発行